

歴史の発掘

中村直勝

一

歴史学の狙うところは、過去に起った事件を研究して、その年月日や関係人物の氏名を正確に探知し、事件の推移を的確に把握することであって、今日までの歴史学者の多くは、その任務に忠実であった。

そのために、出来るだけ努力して根本史料を探索し、それに正鵠な判断解釈を加え、高度の常識をもって、その史料から歴史を組立てて、歴史事実を伝えんと、懸命に精進して来たのであった。

然るに、そうした努力精進の結果として生み出された歴史は、何となく冷たく、何となく味気なく、人間の向うの世界のことであるかにも思え、もう一つ迫力に缺いておるやに思えた。何の故であろうか。強いて言えば、把握探知された歴史は微に入り細を穿っておりはするが、何となく虚事であるかに聞え、他人の物語であるかに感取せられ、従って歴史学とは棒暗記の学問であるかに思われて、一種の敬意を払われたただけであった。

それは、勿論、歴史学徒の力が不足しておるからであろう。

それならば、歴史の学問に参加しておる者として、それを拱手傍観、ぼんやりと同調しておっても、良いのであろうか。

歴史と言う学問を、もっと生かせぬものか。史上に活躍する人物に、もっと人間味を持たせぬものか。仏性や人間味を持たせては、歴史の学問の埒外に立つこととなるものか。

われわれ史学の徒の持つ一つの大きい悩みは、歴史の学徒はどこまで史料に即さねばならないか。どこまでも史料以外への飛躍は許されない

ものか、の点にあった。

二

歴史の舞台で活躍しておる人のこと、例えば源頼朝のことを話しておるとき、話す人の脳裡にはその頼朝の年令、容貌、その時の服装、その日の天候や時候、その場所の情景、もし彼に同行者があるならば、その数、その服装等を、悉く一応心に描いて、話をされるのだろうか。そうされるならば、たしかに、生き生きとした歴史が語られるはずである。われわれが歴史を教えられたとき、それを覚えるときに、われわれの胸のどこかに、その舞台を描き、そこに活躍する人の動作を想像し、その対話の有様に想到するならば、われわれは容易に、且つ明瞭に、すべてがイメージとなって、心中に確かに残るのではなからうか。

ただ単に活字に植えられておる書物の表面だけで、歴史を解釈するから、すぐに忘れてしまうのであり、その結果は無味乾燥、死者に等しい歴史しか残らないのではないか。

その点では、もし言うならば、平家物語を声を出し、節を附けて、読み上げるならば、諸行無常であるかに見える歴史の底に、流れる人生が生き生きとして再生するのではないか。後白河法皇が太原に御幸あって、建礼門院の白衣姿を御覧になるときに、秋草の咲きこぼるる山寺の佗びしさが、しみじみと眼底に浮んで来るのではないか。『太平記』は黙読されてはならない。朗読されるべきであって、眼から覚えないうで、声から覚える歴史には、生命がある。

嘗って私は、利休の自筆書状を、年次順に読み上げ、読み上げ、そこに書かれておる「秀吉」との関係を、把握して見ようと試みて、成功したことがあった。

利休と秀吉とは、もとは、共に織田信長に仕えた同僚であった。寧ろ利休の方が先輩であり、文化人であった。それが、本能寺の変によって、一転して、利休は秀吉に仕える身分に替ってしまった。それから、月日と共に、主従の区別は確立し、時には利休は秀吉の頗使に甘んぜねばならない身分となった。

利休の手紙に現われる秀吉は、藤吉郎どのから秀吉公に変わった。利休の手紙に見える藤吉郎どのには、親愛と慈育の心が籠るが、秀吉公には

敬意の底に、軽視の氣心がひそむやに思えた。大声を揚げて、徐ろによんでおると、そうした微細な心の波動が耳朶にひびいて来る。

常に私は学生に対して、古文書を取扱い、史料を研究するときは、それを大声で幾度も幾度も読み上げるべきであることを、強い言葉で慫慂して来た。

一二の例を示して見よう。

三

後醍醐天皇の場合を例示する。

被綸言你、辛酉之支干者、古今之所慎也、本朝術数、雖不當革命之厄運、中古以来、猶有致每度之祈謝。就中、今年二星合、連月三ケ度、其外、天変重疊、日慎無聊、若非仏法之護持者、争得皇朝之安全乎。殊抽懇懷、宜令祈申之由、可有御下知興福寺者、綸旨如此、以此旨、可令申沙汰給、仍執啓如件。

三月十二日

春宮大進季房

謹上左少弁殿

〔春日神社文書〕

東洋の古代天文学によると、年号を数えるに十干と十二支を組合せて、甲子に初まり癸亥に終る六十年間を、一組の年次と考えた。そして最初の甲子の年は、物の初めであるから、年次の上においても、めでたき年次であろうと解し、五十八年目の辛酉年になると、世紀末の氣分が流れ、物事がだれることになるから、この年次になると、氣分を引締めるべき必要があるとした。その一方便として、甲子の年次にも、辛酉の年次にも、年号を新たに制定することを必須である、と言う理論を立てた。それを甲子革命辛酉革命という表現を用いた。

わが国にも、その思想は、醍醐天皇の時に移入された。昌泰四年（九〇一）辛酉の歳、延喜元年と改元し、村上天皇康和四年（九六四）甲子歳を康保元年と改め、爾来孝明天皇の萬延二年（一八六一）辛酉を文久元年、文久四年（一八六四）甲子を元治元年と改元するまで、一二の例

外はあるけれども、そうすることが佳例であり、恒例であるとして、辛酉と甲子の改元は確保せられた。

後醍醐天皇即位三年目の元応三年（一三二一）が辛酉に相当した。二月廿三日に元亨元年と改元したのであった。

その三月十二日に春宮大進であった万里小路季房が、後醍醐天皇の綸命をうけて南都興福寺に皇朝の安全を祈願すべきことを、興福寺担当の南曹弁に伝達したものが本書である。それを読んだと見ると、文意は極めて堂々としており、今年は辛酉の年に当たったが、本朝の歴史では辛酉革命と言った悲哀もなかったから、必ずしも中国思想を格守する必要があるまいが、それでも中古以来の恒例によって、改元しておいたが、この上はなお仏法の護持は希いたい、これは心安めのためである、と言わなければならない語勢である。

後醍醐天皇が胸を張って厩堂に立たれた時の氣宇が溢れる。この翌年後宇多上皇の院政も罷みて、後醍醐天皇の親政が、久振りに朝廷に光輝を見せる時である。強めて言えば、仏教何するものぞ、と言わなければならないの綸言である。雄々しい声が聞える。然るに。

四

被綸旨你、右、以王道之再興者、專神明之加護也、殊當社之冥助、欲致四海之太平、仍退逆臣、為令復正理、拳義兵、所被企征伐也、速得官軍戰勝之利、可歸朝廷靜謐之化旨、凝精誠、可祈申、勅願令成就、勳賞可依請者、依天氣狀如件。

元弘三年三月十四日

左 中 将（花押）

杵 築 社 神 主 館

〔杵築大社文書〕

はどうであろう。後醍醐天皇が関東の北条氏幕府を討滅せんとひそかに画策されつつあったことが漏れて、京都六波羅探題が急遽宮中を襲うたので、天皇は東大寺に難を避け、鷲峰山を通って笠置山に行在された。元弘元年（一三三一）八月廿七日のことであった。

九月廿八日笠置は陥り、十月三日には天皇は六波羅に幽閉され、翌二年三月七日は隠岐に移されることになった。

隠岐の波路に遠行せられること一年。元弘三年（一三三三）閏二月廿四日天皇は隠岐の行在を出御。廿八日には伯耆船上山に移御になった。名和長年の忠勤によりて、天皇は将に再び京都の天地に復帰しようとした。その三月十四日、出雲の杵築大社に出された後醍醐天皇の勅命が

この一通である。

それは左中將の署名になっておる。左中將の筆のように見せてあるが、その筆蹟から見ると後醍醐天皇の御親筆になるものらしく、並々の勅書とは思われぬ威風がある。

然るに、その内容を見ると、何となく弱々しい聲音がする。「王道の再興」と仰せられ「義兵を挙げる」と揚言し、「官軍戦勝の利」と言われるけれども、どうして天皇の親兵を、天皇御自身が義兵とか官軍とかいわねばならないか。いう必要があるのか。四海の太平を致すためには逆臣を退けねばならぬと言って、最後に、勳賞は申出に依りて下賜されるであろうと、附言し、一種の利得をもって、皇軍を扶翼するような勧誘をする言辭は、どうだろう。一天万乗の大君の勸旨としては、神氣の足らざるものと思うであろう。

もう一通、掲出する

敬白

立願事

- 一 天野社、就垂跡本地、可奉甚深法樂事
 - 一 行幸高野山、可興密宗事
 - 一 為當山、仏法紹隆、興寺領、可寄田地事
- 右条々、天下静謐之時、可果遂之状、如件。

延元元年十二月廿九日 天子尊治 敬白

隠岐からの後醍醐天皇は元弘三年（一三三三）六月五日京都に還御。建武中興の政治を実現して八月五日には論功行賞があった。英姿は紫宸殿上に輝いた。

ところが、間もなく論功行賞に対する不平が、天下翕然として起り、不手際が目立った。足利尊氏の反旗となり、湊川合戦の失敗となって、

歴史の発掘

歴史の発掘

延元元年（一三三六）十二月廿一日に天皇は京都御所を御脱出、廿七日に吉野山に行幸になった。その翌々日附をもって、天皇は宸翰を親しくして、高野山の天野社にこの立願をされた。小さな切紙を使用しておられるところから推察すると、密使はこの勅書を、髻か襟の中にでも潜ませて吉野から高野に走ったものであろう。

この勅書については、「天子尊治」の御自署があることが気になる。今迄は、この勅書は、京都では尊氏の圧力によりて迎立された光明天皇があらせられることを、少しもお認めにならない聖慮の立派さで、それが「天子」という言葉で表現されておるもの、と解釈されて来たのであるが、果してそうだろうか。

寧ろ、天皇が親らを「天子尊治」と言わねばならぬところに、暗雲が漂うと見ては悪いだろうか。天子尊治の御署名に不自然さを感じ取る。

吉野山に逃避したけれども天下の天子は自分である、と仰せられたことは、言わずもの発言ではなからうか。

御意のどこかに、虚声があるのではないか。一陣の寒風が宸襟を悩ましてやしないか。

御意をもう少し掘りさぐってほしい。

五

足利尊氏の場合を見よう。

伊勢国凶徒退治事、事書一通、進之候、守此旨、可令致沙汰候、恐々謹言。

元弘三年五月廿四日 前治部大輔高氏 御判

謹上吉見殿

〔光明寺残篇〕

隠岐を発輿になった後醍醐天皇は、船上山から山陰山陽を通して京師に還御されようとした。元弘三年三月のことである。

鎌倉幕府の執権北条高時は、その部将足利高氏に命じて天皇を途中に擁して京都還御を実現せしめざらんとした。高時は高氏の去就を疑うてその子息を人質として幕府に提出せしめた。足利氏は、その家柄から言って後醍醐天皇に臣事すべき因縁があるからである。高時はそれを見抜

き、高氏の行動を恐れたからであった。

天皇の東帰を阻止すべく東海道を西上した足利高氏は、果して三河の辺まで来た時に、隠岐の天皇から密使を受け、密旨を承って、天皇の軍に味方すべき決心をした。九州山陽あたりの武士に急使を派しておる。

船上山を発進された天皇は五月十七日、隠岐御遠行中に京都で即位された光厳天皇は廃位さるべきであることを、天下に宣言された。その五月廿一日には鎌倉の北条高時は新田義貞によって討滅された。三日後の廿四日に高氏は、この御教書を出して能登国の豪族の吉見頼隆に、伊勢国にある北条氏配下の兵を討伐すべきことを命じたものである。「伊勢国凶徒討治」という七字に、非常なる語勢がある。後醍醐天皇の勅命をうけて勤皇に転向した自分を、誇らしげに、衆に示した揚々さがある。いそいそとした嬉しさが含まれておるではないか。「吉見殿」とかいた平凡さに、却って力量が溢れておるやに思える。

これでは吉見殿は、その命に应じて伊勢凶徒討滅に参加せざるを得まい。事もなげに、易々と書いた「事書一通、進之候、守此旨」の十字に千万無量の迫力があるではないか。足利高氏得意の一通であろう。

奉寄 石清水社

播磨国福田保地頭職事

右、今度挙義兵之本意者、義貞已下之逆臣、就事、讒邪黎庶方外之生民、幾如欲亡。因茲、諸国令鼓動、四海不砥厓之間、速撓華夏之乱、将致朴素之治也。爰尊氏苟稟當社之廟塵、愁備武関之棟梁、依有神之加被、大功不日而成矣（中略）仍寄進之状、如件。

建武三年正月八日

源 朝 臣（花押）

〔中村直勝藏〕

足利尊氏自筆の寄進状である。

建武中興の論功行賞には足利高氏は天皇御諱の一字さえも賜わって、尊氏と改名するの光榮を得たのであるが、よく考えて見ると、下賜された土地は、下野下総等、京都から遥けき関東地方の土地である。御諱の一字も、名与には相違ないが、実収に到っては、空々莫々たるものである。よく考えて見ると空名を与えて実収はなく、たしかに敬遠されたのであった。

歴史の発掘

尊氏の心中にはむらむらと湧き登る不満の暗雲があった。

その他の事情が纏綿して、終に反天皇の旗を挙げ、鎌倉から入京して来た。

建武三年正月早々、洛南三牧で新田義貞や楠木正成等と相争うた。その時に石清水八幡宮に戦勝を祈念し、福田保地頭職を寄進すると言った願文を奉ったものがこれである。前後数百言、極めて謹直の文字でもって、黙々と筆を運んだぎごちなき自筆願文であるが、この時の尊氏の内心に些かの邪心ありとは見えぬ。

が、熟読玩味して見ると二三ならず空空しい用語がある。「挙義兵之本意」と言える言葉は、何となく響きが弱い。強さがない。尊氏は自ら自分自身の弁護士を勤めておるやの感がある。更に「苟くも当社の廟塵を稟け、愁ぢいに武関の棟梁に備わる」と言って、当然に神助のあるべき身分を提示し「神の加被あるに依りて、大功、日ならずして成らん矣」と言っておる言声も、虚声であり、空声である。少し文句が多きにすぎ。内心の動揺は疑うべくもない。自分を義兵と言ひ、義貞以下を逆臣と言っておるが、果して尊氏自分、十全の自信をもってこの言を吐いたろうか。忙しい戦陣中に、このおしゃべりをしておる尊氏の体温は、上騰してやしないだろうか。

次の足利直義の御教書と照合してほしい。

楠木判官正成去月廿五日於湊河、令討取畢。新田義貞已下凶徒等、逃竄山門之間、可加誅伐之由、所被成院宣也。依之、差遣討手之処、高尾寺衆徒等、令与力義貞、構城塙云々、早可注申実否、若令同意高尾、不注進子細者、可被処重科之状、如件。

建武三年六月十日

(花押)。直義

梶尾寺々僧中

〔梶尾寺文書〕

さきの尊氏御教書に見えた正月の合戦は、一旦は尊氏の戦勝で入京の目的を遂げたが、新田楠木の皇軍に襲われて、京都の止住も叶わず、兵庫打出浜から西遁した。そして巧みに九州地方の武士を蒐めて東上。尊氏自らは海軍の将となり、弟直義が陸兵を率いて、延元元年（建武三年）五月廿五日湊川で会戦。楠木氏は正成以下の一族はすべて戦死。義貞は生田森の陣を引いて逃走。叡山に閉籠った。

いま、それを討伐すべく直義が、高雄山神護寺及び梶尾寺に御教書を出して、山僧が義貞に同調せざることを需めた時のものが、この一通である。直義が冒頭に楠木正成を「湊河で討取らしめ畢ぬ」と揚言し、ついで逃げた「新田義貞已下凶徒等」と侮視した言葉を使っておるところ

は、如何にも得意満面の言葉ではなからうか。若し梅尾が高尾山神護寺に同意し、「子細を注進せざるにおいては、重科に処せらるべし」と断言せるところ、明らかに戦を有利にした足利勢の自信が見えるではないか。

行間や語感に漂う軍陣の気分が、こうした御教書を、高声で読み上げることによって、掴み出せるのではないか。近頃入手した一通からも、何か掘り出して見よう。

六

昨年のも暮であった。反古のように軽く取扱われておる一通の文書を見た。

正徳六年（一七一六）の年号が端書にあるので、却って徳川時代の文書として軽視されたものかも知れない。その上、一見したところ覺束なような小供小供した仮名文字であるので、却って単なる女房文として、重きをおかれなかったかも知れない。

だが、それは、まぎれもない中御門天皇の宸翰の御消息である。文字に天皇の御筆くせがよく現われておる。

奉書紙を二枚用いた仮名書御消息で、わざと女房文であるかに粧い、女房奉書の形式を採用されておるものである。よみ下して見る（写真参照を乞う）

將軍家より、八十の宮の御かたへ、此たひの、御しゆうき申され候御使として、忍の侍従をのほせられ候。さん内の事にて、めてたさ、ことに、守次の御太刀、わうこん三百両、二か三しゆ、しん上、おはしまし候て、まことに、いく久しく、万々せいと、欣入らせおわしまし候。此よしを、よくよく御心え候て、つたへられ候やうに、心え候て、申とて候。

かしこ

（引点）

右大将とのへ

庭田前大納言とのへ

「仰^{正徳六}
二^卅」

女房奉書の約束による「仰書」があるので、これは正徳六年二月卅日の中御門天皇の勅旨を、側君に侍べれる内侍が承わりて、権大納言正二

歴史の発掘

位近衛右大将であった徳大寺公全と、正二位前大納言の庭田重條とに、伝宣したものである、とする形式のものである。二人の宛名をずっと下の方に書いてあることも、この一通が天皇の親書であることを暗示する一証である。

正徳四年（一七一四）八月廿二日第百十二代靈元天皇の皇女八十宮吉子内親王御降誕。時の天皇は第百十四代中御門天皇であった。天皇は靈元天皇の皇子第百十三代東山天皇の皇子であり、元禄十四年の御降誕であったから、正徳四年には御十四才であった。

翌五年九月廿九日八十宮（御年二才）は徳川七代將軍家継（九才）との間に婚約が調うた。

六年閏二月十八日めでたき御納幣があった。家継十才、八十宮三才。

本書はその前月二月卅日のもので、御納幣の準備に忍城主侍従が上落して、万事の御準備を整えた。そのとき忍侍従は参内して、御嘉詞を申述べ、その奉納品として、天皇に、守次の大刀一振、二荷三種の酒肴の外に、黄金三百両を進納した。天皇の御満悦はその極に達した。

黄金三百両は相当の金額である。それが御祝儀のしるしとして、納められたのであるとすれば、信幣物の納入が、どの位の高額であったろうか、推定することも出来よう。

八十宮はそこで三月に江戸に下向されたが、不運にして、將軍家継は四月卅日に逝去してしまった。十歳であった。急に八代將軍吉宗が迎えられることになった。

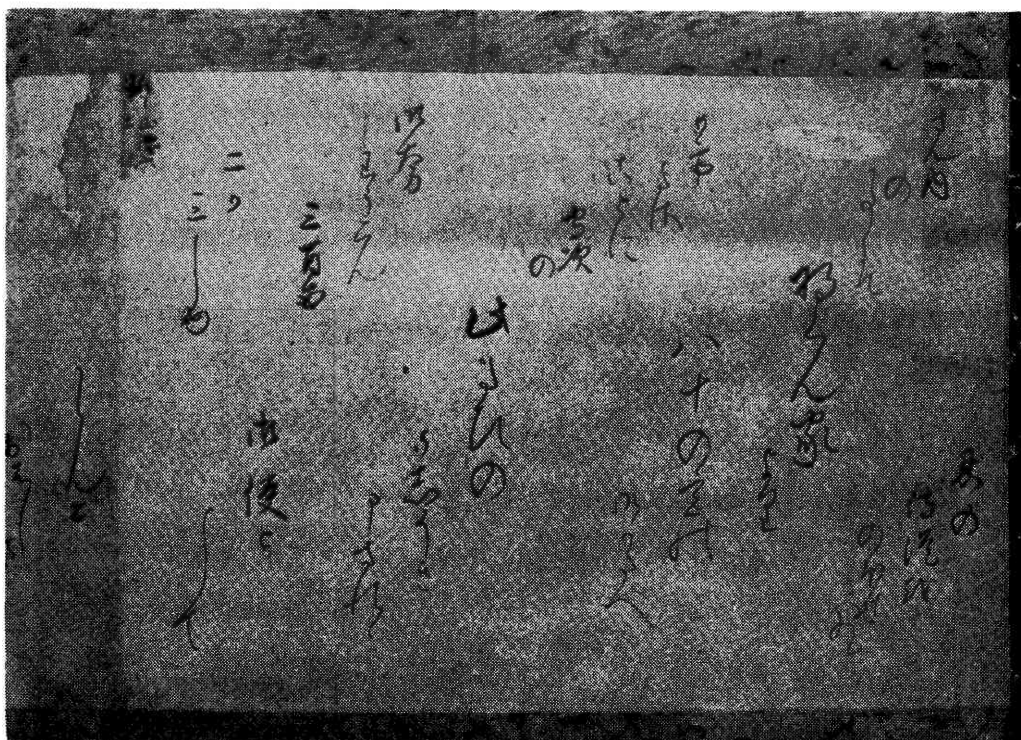
この婚儀が、形式だけのものであったかは、言うまでもあるまい。

中御門天皇この時、玉算十六。御若々しい青春の御年頃である。言わば、まだしもの御年である。

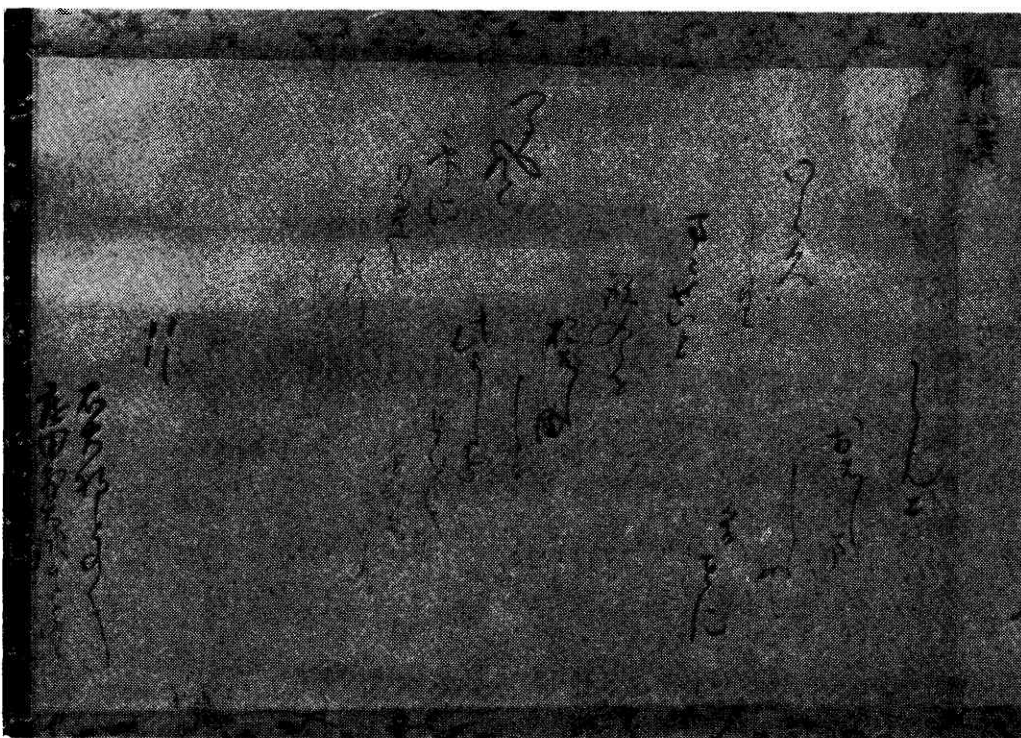
とすれば、この小供小供しい宸翰は、寧ろ御立派であると称えるべきではないか。

かくして中御門天皇若書きの宸翰一通が、単なる女房文として、反古紙の取扱いをうけ、視界から消失したかも知れないのに、拾い上げられたことは、歓喜すべきことであろうが、それ以上に重大なることは、八十宮の御婚儀において、宮中に黄金三百両が湧出したことであり、それが御手許を如何に祐富豊満に潤わしたかのことであろう。

更に、もう少し皮肉な歴史も、これから掘り起せるものがある。あまりに味気ない表現は公開したくないので、わざとここで筆を閉ぢる。



(一) 中御門天皇宸翰 (前半)



(二) 中御門天皇親翰 (後半)